
呼び声

鷹槻れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

呼び声

【Nコード】

N7232F

【作者名】

鷹槻れん

【あらすじ】

一人仏壇の前で妻の死を悼んでいた男の心を救ったものとは？

犬を飼っている。

今からおよそ八年前、近所の公園に捨てられていた子犬で、雨の日に拾ってきたからレインという、安直なネーミングの雌犬だ。

レインは凄く臆病な犬で、家族以外の人間には絶対に懐かない。恐らく、捨てられていた公園で何か怖い目に遭ったんだろう。

そんなヤツだから、家の敷地内に他人が入るうものなら物凄い剣幕で鳴き喚くのだ。

そういう時は宥めてもすかしても吠え続けたりするから、正直止めてくれ、とか思ったりする。

でもまあ、そのぐらい吠えれば番犬としては優秀かな？かと思っ
ていたら、どうやら近所の人の話を聴くとそうでもないらしい。

「レイちゃんを見てれば、早瀬さんが家にいらっしやるかどうか、
すぐに分かりますよ〜」

レインの奴、俺が居ないときには貝の様にだんまりを決め込んで
いると言っ。

まるで自分はそのには居ませんよ〜、という感じなんだとか。

怖がりで内弁慶もここまでくると本当に筋金入りだな、と思った
りする。

レインの散歩を終えて帰宅すると、つい先日までは明かりの灯っ
ていた家が、どんよりと暗がりに沈んでいた。

その様を見て、我知らず溜め息が漏れる。

ついほんの数ヶ月前まで当たり前のように一緒に暮らしていた嫁
が、病気を患って呆気なく旅立ってしまったのだ。

『レイちゃんは臆病だけどつても賢い子なのよね〜？』

そう言っつてはこの馬鹿犬を目を細めながら撫で回していた姿が、
今はどこにもない。

結婚して十数年。

子室に恵まれなかった俺たちにとって、レインはある意味我が子のような存在だった。

「レイン、ほら、飯だぞ。食べ」

玄関先で愛犬にご飯を食べさせてから、家の中に入る。

薄闇に閉ざされた和室で一人、仏壇の前に座っていると、何だかとてもやるせない気持ちになってくる。

「何でこんなに早く逝っちゃうかな……」

声を出して呟いてみると、どうしようもなく気持ちが乱れて柄にもなく嗚咽が漏れた。

いつもこんな風に仏前で色々話しかけてみるけれど、当然のことながら死人が返事をするはずはない。

「たまには返事くらいしろよ」

文句でも何でもいいから言っつて、昔みたいに俺の話相手になつてくれ。

人前では平然とした素振りを見せている俺だけど、さすがに一人になると感情のセーブが利かなくて参る。

男がメソメソ泣くもんじゃない、と分かっているけどもこの寂寥感だけはいつまで経っても慣れることが出来ないのだ。

それでもいつもは声を押し殺して泣ける俺なんだが、今日はどういわけか堪えても声が漏れてしまった。

と、程なくして玄関先に繋いでおいたレインが、けたたましい声で吠え始めた。その様に、俺は泣くに泣けない状況になる。

(誰か、来たのか?)

この騒々しいまでの吠え方は、そうとしか思えない。

急いで顔を洗って玄関に赴けば、予想に反して来客があるような気配はなくて。

俺の顔を見詰めてワンワン吠え立てるレインに、俺は戸惑いながら近付いた。

「どうした?」

問いかけてそつと頭を撫でれば、腹を見せて撫でてくれ、とせがむ。

「仕方ねえな」

その、およそ女の子らしくないあられもない姿に思わず笑みが漏れて、俺は彼女の横にひざまずいて望みを叶えてやる。

土と埃のにおいの混ざる、レインの温かな身体に触れていると、段々と気持ちが落ち着いてきた。それでもやはり少しすると我知らず涙が溢れてきて……。俺はうつむいて涙が頬を伝うに任せた。ペロリ……。

突如頬に触れた湿った感触に焦点を合わせれば、寝そべって腹を返していたはずのレインが俺の顔を優しく舐めてくれていた。

いつもはガサツなお嬢さんが、こういうときだけはとてもおしとやかなレディになる。

「慰めて……くれているのか？」

問えば、きよとんとした瞳で見詰め返してくるレインが可愛くて、俺は彼女を抱きしめて思いつきり泣いた。

そんな俺に抱きしめられたまま、レインが激しく尻尾を振り始める。

「どうした？」

問おうと口を開きかけた俺の背後から

『ね、貴方。だからレイちゃんも賢いって言ったでしょう？』

懐かしい声が聞こえたような気がして……。俺は急いで振り返った。けれど目に映るのは暗がりに沈む廊下だけ。

それでもそんな虚空を見詰めてレインが嬉しそうに尻尾を振り続けていることに、俺は酷く安堵した。

【END】

(後書き)

先日、私が一人で2008年6月に癌で亡くなった母の死を悼んで泣いていたとき、我が家の愛犬がこんな風にして慰めてくれたことがあります。

それを思い出して書きました。

暗めのお話ですみません(> <)。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7232f/>

呼び声

2010年10月28日07時42分発行